

サバ! 主にある交わりの祝福に感謝!!

女性会連盟とサバ神学院

女性会連盟 26 期会長 谷口 和恵

皆さま、こんにちは! 今回の会報は 2024 年 6 月までの三十数年間に渡り女性会連盟が支援してきたサバ神学院のことを特集しました。かつて私たちの教会が諸外国からの祈りと支援を受け成長してきたように、連盟が他国の宣教を支えて来た尊い年月だった事に思いを馳せています。またこの活動に沢山の方々が祈りながら励んでくれたことに感謝いたします。

サバ神学院ではこれまでに多くの牧師を輩出しており、日本からの長期支援に大変感謝されているとお聞きしています。その事は取りも直さず私たち女性会連盟が神さまの御用のために奉仕ができた恵みの時だったとも言えるでしょう。私たちの支援は終了しましたが、この間の出来事はこれからもサバ神学院の歩みの上に大きな力となっていく事と思います。神さまの助けによって福音がこれからも広がっていき、お互いの宣教活動が祝されますように。そして祈り支え合える関係で在り続ける事ができますように!

女性会連盟 75 周年記念誌より

婦人会連盟会報 1993. 10. 15

日本福音ルーテル教会宣教百年



宣教百年記念わたしたちの取り組み

「サバの神学生支援について」

すべてのことに時がある。神ご自身がこの時を定め、与えてくださる。生かされて生きる生涯の中でこのような経験をすることがありますが、婦人会連盟がアジアの神学生の支援を祈り、考え始めてから、サバの神学生の支援が具体化するまで、思いもかけずこれにかかわりをもつようになって、その思いを深くしています。

婦人会連盟は百年の課題のひとつにアジアの神学生支援を掲げ、役員会を中心に具体化に向けて協議をつづけてこられました。多くの方々が相談にも乗ってくださり、いろいろな候補の神学校があったということですが、ようやく昨年の秋、サバの神学校の神学生を支えようということに決まりました。しかし、相手のあることで、心の触れ合う交流が必要になります。ちょうどその頃、ルーテル世界連盟主催の神学教育者会議がサバのコタキナバルで開かれることにより、私の出席が決まっていました。連盟の役員の方々はこれを知って、この機会に現地で責任者とお会いして、婦人会連盟の思い、祈り、企てを伝えて、その意向を伺ってくださるよう託されたのでした。時が与えられたほかに、人も与えられました。お目にかかるべき方はサバ・パーゼルキリスト

支援する神学生のお二人



ジャリン・タンキスさん



チャン・ウエルダーさん

定められている国で、中国人キリスト者に始まって現代人にも伝道を広めているサバのルーテル教会の会員は三万五千人。主にあるつながりと交わりの中で、感謝をもって奨学金を受けてくださることに、感謝と賛美を深めたいのです。

マレーシア連邦は、マレー半島とボルネオ西部の二地域一州からなる国です。サバはボルネオ西部の一州で、州都はコタキナバルです。日本から約五五〇〇キロ、週一回成田からの直行便で六時間のところですが、マレー人、中国人、現地人から成る多民族国家で、言語も文化も多様ですが、マレー人は歴史的、伝統的にも、憲法でもイスラム教と

教会(ルーテル教会)議長で、神学校長でもあられる徐恩友監督でしたが、この方はいろいろな教会とおして、私の年来のアジアの友人のひとりでした。神が時と人を与えてくださった、この思いで、長い時をかけてではなくても、連盟の思いは伝わりました。サバの神学校や神学生の現状を伺って

帰国し、役員の方々にご報告して、「二名の学生に四年間の授業料を支援する」という具体的な提案をお伝えすることまでが私の小さな務めでした。

ルーテル神大教授 徳善 義和



## 主の福音伝道を担う

河野 久美子

サバ神学生支援プロジェクトを立ち上げた私たち女性会連盟は25期をもって30年間の活動を終えました。

その間、多くの牧師が誕生し、数々の教会が設立され、主の働きに従事する人々が与えられました。

サバ教会に対しては、中国やドイツなど数ヶ国の教会から支援があり、神学校設立当時は、戦争の置き土産の兵舎が校舎として使われていましたが、創立25周年記念式典は立派なホールで開催され、その発展ぶりに感動したのでした。

ボルネオ島のサバ州はインドネシアと隣接し、第二次世界大戦では戦場となり、マレーの人々は苦難の歴史の中にありました。

常夏のサバはジャングル地帯が広く、苦難な事は様々あるにもかかわらず、小さな教会がいくつも建てられ、牧師が派遣されていました。昔、中国のクリスチャン達は、船でサバに渡り、福音伝道をはじめ、情熱と工夫を重ねて、教会と地域の発展に励んでこられたのです。私たちのプロジェクトにも協力していただき、特にパン・ケンピン牧師夫妻は女性会連盟との交流にも力を貸して下さいました。

プロジェクトの終了にあたり、これからいろいろ

な手段を通して学び、親睦の交流があることを期待します。

個人的なことですが、2004年に夫・重昭と共にパソコン指導奉仕でサバ教会に行き、マレーの人達とも親しく交わり感謝でした。

(連盟17期文書役員)



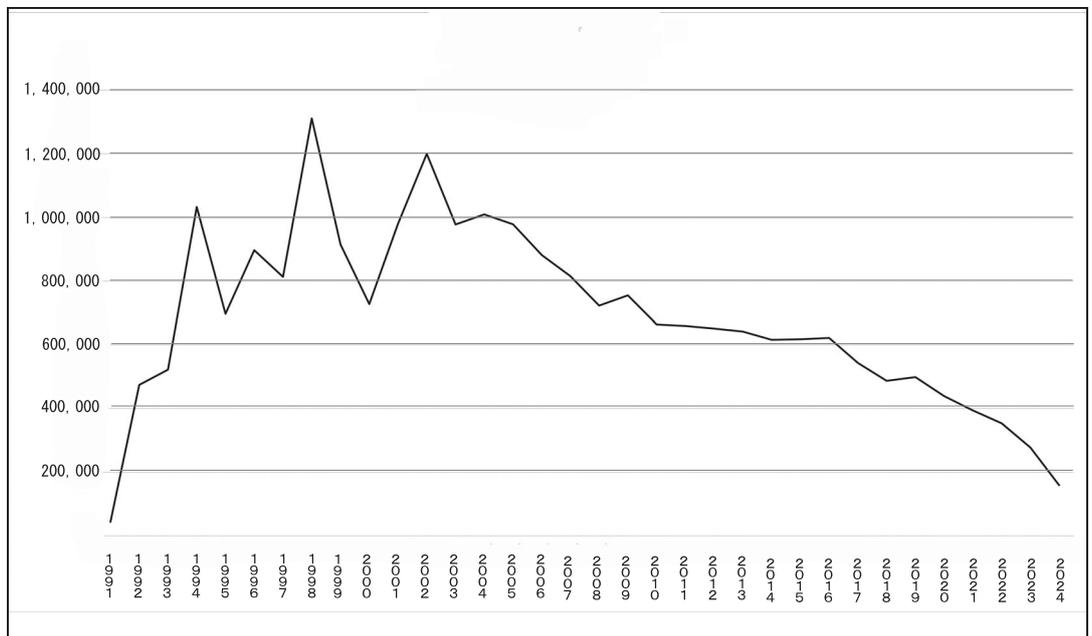
パソコンの指導。受講生は曜日ごとに分かれて学んだ



河野久美子さん、ケンピン先生、河野重昭さん

年	金額 (円)
1991	43,700
1992	474,209
1993	522,501
1994	1,033,122
1995	696,836
1996	896,759
1997	812,811
1998	1,311,331
1999	915,218
2000	727,500
2001	980,120
2002	1,200,101
2003	977,507
2004	1,009,299
2005	978,050
2006	881,560
2007	815,190
2008	722,778
2009	755,000
2010	664,300
2011	659,750
2012	651,344
2013	642,245
2014	615,950
2015	617,900
2016	621,901
2017	543,800
2018	487,060
2019	498,850
2020	439,190
2021	394,200
2022	353,900
2023	277,600
2024	159,000

## サバ神学院神学生への支援金 総額 23,380,582 円



## サバ! 主にある交わりの祝福 清重 尚弘

女性会連盟(当時、婦人会連盟)15期会長・石原京子様から、アジアの神学教育支援のプロジェクトを開始するにあたり、適切な神学校はどこかのご相談をいただき、ご主旨に最適なのはサバの神学院と申し上げました。

当時、LWFアジア神学教育委員会の議長の立場にあり、情報を集めておりました。20校あり、「確固たる方針を持ち、自立且つ将来性のある校」との観点から選んだのがサバ神学院。サバ神学院は、歴史的にはスイスのバーゼル教会(プロテスタント)の中国伝道にルーツをもつ教会による設立(1988年)で、高等教育学校の設立が州の開発計画にも沿うものとして知事も肩入れ。わけでも、トゥ・エン・ユー校長は高潔な学識の人、その指導の下で、中国語、英語、マレー語

で教育、ことにマレー系原住民の人々への伝道と地域開発をミッションとして掲げているのが特色。

キャンパスは真新しい建物とともに、旧日本軍の兵舎を再利用した寮が。石原会長を迎える方々が「日本人は、私たちが占領しようとして来たが、今度は“キリストのよき隣人”として来て下さいました」と感謝を述べてくれました。トゥ・エン・ユー校長をお招きし、神学生一人を伴って来日していただいたこともありました。

アジアの20校は、外国からの補助80%、自立校は3校(香港、サバ、東京)のみ、アジア教会の深い問題でしょうね。サバ神学院との交わりを通して互いに恵み、学びを分かち合う祝福の30年でございましたね。

(引退牧師・日本ルーテル神学校名誉教授)

### 交換プログラム

西川 晶子

2003年、神学校2年時に、LWFと女性会連盟共催の交換プログラムで、当時の宮澤真理子神学校チャプレンと共に、約40日間サバ州に滞在しました。現地ではパンケンピン先生にコーディネートしていただき、前半は主にサバ州全体の訪問、後半の10日間ほどはサバ神学校の寮に滞在したと記憶しています。

都市部の教会では中国語教会の活気に触れ、また少数民族の農村部の教会では、その地域出身の神学生が、神学校で神学と共に農業技術も学び、卒業後は村に戻って村全体の技術向上に努めるのだと教えていただいたことが、土地の伝統を取り入れながらの礼拝と共に印象に残っています。農村部の教会訪問では、サキアとラティファという同世代のプレ神学生が同行してくれて、お互い片言の英語で夜遅くまで語り合ったことも思い出です。

またある農村では、村中の方が大歓迎してくださる中で「日本語は話せるが、日本人は大嫌い」というお爺さんがおられ、その方は私たちの滞在中、まったく姿を見せられませんでした。また、サンダカンでは、日本軍にお父様を殺されたという牧師にお会いし、その牧師が「私にとって今も辛い出来事だけれど、それは今あなたがたを愛さない理由にはならない」と仰ったことが忘れられません。サバ神学校との関わりは、このような日本とマレーシアの歴史の中で始まったのだと聞いています。支援関係はいったん幕を閉じるとのことですが、これからも新しい関係の形が見つかることを願います。(厚狭・下関・宇部教会牧師)

### 訪問から得たもの

### サバ神学院の思い出

森下 真帆

私は2019年の10月に、神学生としてサバを訪問するという貴重な機会をいただきました。その日々を今でも鮮やかに思い出すことができますが、最も印象に残ったのはやはりサバ神学院の活気でしょうか。

当時、サバ神学院では100人以上の神学生が学んでいて、設備の充実度もかなりのものでした。ガラス張りの図書館に、1000人入る講堂、バドミントンコートがついたレクリエーションルーム…学生寮や家族寮も完備されていて、神学生たちの生活は豊かなものでした。女性会連盟からの奨学金を受けている現役神学生のみなさんともお会いしましたが、サバ神学院ではお金の心配を一切せずに勉強に打ち込むことができるそうで、それぞれに感謝を述べられていました。

また最終日には、過去に女性会連盟からの奨学金を受けて牧師になられた先生方とお会いしました。その数なんと10人あまり。今ではもっと増えているでしょう。みなさん各地の教会でご活躍とのことでした。お若い先生が多く、昼食を共にしながら教会の未来について語り合ったことが心に残る思い出となりました。

あれから6年経ちましたが、今なおサバでは活発な伝道者育成が行われていることと思います。サバでの経験を胸に、私も日々の務めに励んでまいりたいと思います。

(小倉・直方・門司教会牧師)

## サバ神学院との出会い 石原京子



ルーテル教会百周年記念に感謝して婦人会連盟はアジアにある神学校で学ぶ神学生を支援することが総会で決議されました。

当時、ルーテル学院大学・神学校学長の清重尚弘先生のご指導のもと、日本兵が残して行った壕を校舎として学んでいたサバ神学院の神学生を支援することになりました。

やがて新校舎が立ち献堂式の後、卒業式と按手式が執り行われることになり、清重学長と私が招かれ出席いたしました。「イスラム教を国教とする国で主のみ言葉を伝えて行く難しさに自信を失い不安と戸惑いに志しを断念しようかと不安を覚えた時に、日本の婦人会の皆さんの支援と祈りに励まされ按手を受けることができました。ジャングルに立てられた教会に、農村伝道へと、まだ主の愛を知らない人たちに宣教する約束を神に誓うことができました。」ときらきら輝いた目で言われました。

サバ神学院教授ケンピン先生が連盟とサバ神学生の橋渡しをしてくださり、5年の約束が期を重ねるごとに交流が深まり31年間、連盟の働きに輝きと恵みをを与您ていただきました。サバ神学院との出会いに感謝し、この出会いが次の働きへと継承していきますことを信じています。

(連盟15期会長)



1994年8月、サバ神学院竣工式。日本福音ルーテル教会婦人会連盟代表として前期会長(当時)であった石原京子さんもテープカットを行った。

## 支援から交わりへ 小泉小枝



故星野淑江さんが「私達は今まで海外教会の援助を受けてきた、これからは私たちが外国の教会を援助する時代よ。一人がコーヒー1杯分を捧げたら出来る事よ。」

と熱心に訴えられたのは遙か昔。コーヒーを飲む洒落た店もなく、ましてや主婦がコーヒーを飲みに行くこともない田舎に私は住んでいた。

しかしそれから10年後、3回の連盟総・大会を経てサバ神学院の支援が始まった。日本中の女性会の祈りと工夫によって、またトウ院長、ケンピン先生、神学生のイエン氏との暖かい交わりによってこの支援と交わりは30年間続けることができた。

創立10周年記念にサバを訪問、神学校近くにある風雨にさらされたバンガローのような建物が神学生の家であった。学校の建物には窓ガラスが無かったが、卒業証書を渡されるトウ校長の慈父のような暖かい眼差しが印象的であった。

式後の会食には各国の来賓とともに卒業生の家族も一緒に、襟ののびたTシャツを着て鼻を垂らした小さな子供達が母親と共に誇らしく晴れやかな顔で参加していた。

25周年記念では学校も近代的になり、神学校は海外に宣教師を派遣されるまでに発展していた。けれども30年前の人と人との暖かい交わりに支えられて今があることを忘れてたくない。これからも良き友として交わりが続くことを願いつつ。(連盟17期会長)

2019年、ケンピン先生ご夫妻は日本を訪問、各地で交流された

